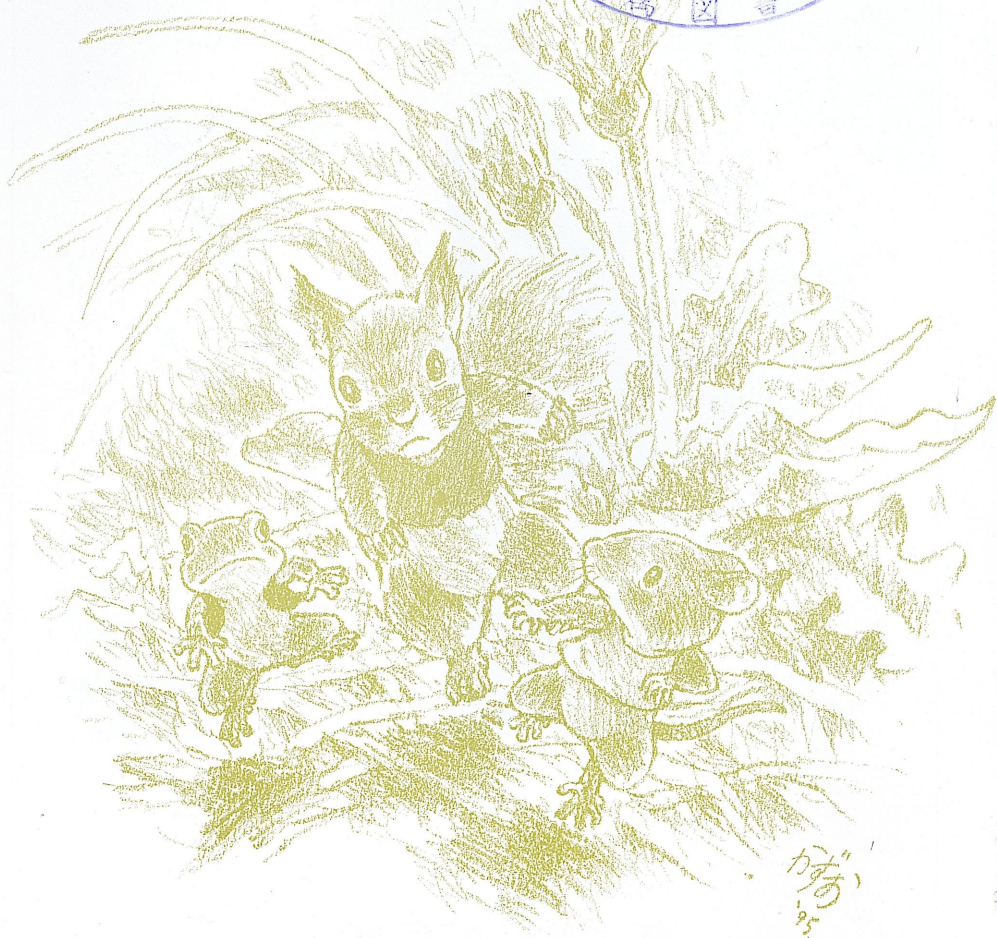
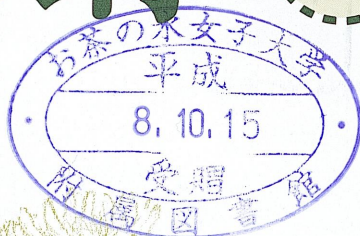


幼児の教育

'96
9月号

家庭—保育所—幼稚園



子どもの心とまなざしで

— 倉橋惣三絵本エッセイ —

倉橋惣三がキンダーブックに寄せた解説をまとめた一冊。子どもをあたたかなまなざしで見つめた彼の姿がよくわかると共に、私たちに子どもの心理とものの見方をていねいに教えてくれる。リズムカルで詩のようなやさしい語り口が心地よく、プレゼントにも最適である。



新刊

倉橋惣三 著
解説/本田和子



B 6 変型判・定価1,200円(本体1,165円)

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第95巻 第9号



幼児の教育 目次

—— 第九十五卷 第九号 ——

© 1996
日本幼稚園協会

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(6)

「センス・オブ・ワンダー」の時代へ……………間藤 侑……………(4)

保育者の世界の一断片

—— ミニアチャーの中でふくらむ想像力！……………津守 真……………(8)

子ども時代と私(3) 戦争と私……………南 佑子……………(14)

「こどもテレホン相談」から(5) 性は人間の絆の根源……………小島 直美……………(21)

「育ち」という言葉……………竹内 順子……………(28)



ある日の育児日記から(69).....佐藤 和代...(35)

おかえりのひととときに.....上坂元絵里...(36)

四季の庭・四季の道 花色あそび.....浅山 英一...(40)

『十里霧中』―息子たちのイギリス公立校体験記(5).....豊田 一秀...(47)

子どもたちへのまなざし(20) タペストリー.....松井 とし...(56)

外国の文献から『心情と知性の教育―日本の就学前と小学校教育に関する考察』

第二章 幼稚園での経験―遊び・コミュニティ・反省.....洪川明日香...(58)

表紙絵・いわむらかずお「なにかありそうだ」

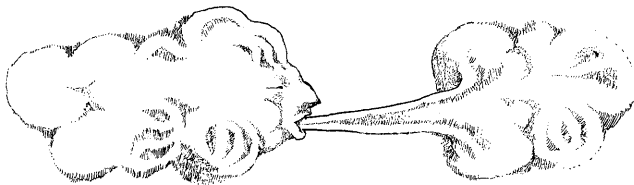
扉題字・津守 真

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・彌永たたえ「雲」

編集委員・田代 和美／伊集院理子・高橋 陽子

編集部・仲 明子



二十一世紀にむけて幼児教育を考える(6)

「センス・オブ・ワンダー」の時代へ

間藤 侑



カウンセリング・マインド

二十一世紀を目前にしての幼児教育界は、必ずしも激しくはないが、大きなうねりに揺り動かされていると言える。平成元年の新教育要領を追い掛けるように、五年度からはカウンセリング・マインドという言葉が重要なキーワードとして登場してきたが、それは、幼児教育の長い歴史の中で経験的に常識化されてきていた保育実践への視点の、大きな転換を求めるものだった。

文部省の保育技術専門講座資料の中でも、カウンセリング・マインドとは、「遊びの高まり」や「行動の広がり」というような、外に現れた部分を評価の中心に据えるのではなく、遊びや行為の内側に秘められた子どもの思いや内的プロセスにもっと注目することであり、この観点から考えると、従来の保育実践ではそうした眼を養い洗練させるような議論やトレーニングが欠如していたと言える、率直に反省していることが目を惹く。

しかし、もちろん幼児教育が今初めてそれに気付いたわけではない。観察できるものを通して子どもの内面を理解しようとする努力は、少なくとも小学校以上の学校教育より遙かに多くなされてきたことは間違いないだろう。カウンセリング・マインドという言葉は知らなくても、本来の意味で「一人ひとり」に寄り添う保育者の姿勢こそ、幼児教育の独自性を支える大きな特徴だったのだから。これからは、そのことをより強く意識し、幼児教育界全体が自信をもって自分たちの仕事を情報発信することが、危機に陥っている教育全体を立て直す力になれるはずだと思う。

二十一世紀を視野に入れて

しかしそのためには、もっと大きな視野をもつ必要があるだろう。教育という営みは常に時代と深く関わる。かつての不幸な大戦のように時代に翻弄されることもあれば、新しい時代を導く道標にもなることは、歴史が証明する。では今はどうなのか。

巨大な対立は消えた代わりに、世界はまた別の意味で危機に直面している。ミハヤエル

・エンデが描いた『はてしない物語』の、「虚無」の不気味な拡がりのように、人が不条理に死に追いやられ、自然は理不尽に汚染され破壊されていく。そのいずれもが、感性や想像力の貧困や欠如につながっていることを否定できない。かつて人類の祖先たちが実に豊かにもっていたという多くの証拠を、私たちは知っているといるのに。

そんな時代に生きて、「二十一世紀にむけて」という言葉を、ただスローガンとして唱えているわけにはいかない。本当にその近い未来につながっていく教育の戦略を、真剣に考えねばならないだろう。

「センス・オブ・ワンダー」

三月末、私は石垣島の浜辺で、生きてもう二度と見ることにない「百武彗星」を見つめながら、レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』（佑学社）の一節をふと思い出していた。

「子どもと一緒に自然を探検するということは、周りにあるすべてのものに対するあなたの自身の感受性にもがきをかけるといことです。（中略）わたしたちの多くは、周りの世界のほとんどを視覚を通して認識しています。しかし、目にはしていながら本当には見ていないことも多いのです。見すごしていた美しさに目をひらくひとつの方法は、自分自身に問いかけてみることです。『もしこれが、いままでに一度も見ることがなかったものだとしたら？』もし、これを二度とふたたび見ることができないとしたら？』と」。

考えてみると、すでに三十年以上も前に『沈黙の春』で地球環境の汚染を鋭く告発したカーソンのこの『センス・オブ・ワンダー』の中から、幼児教育の未来への何と多くのすぐれたメッセージを読み取ることができることだろう。

保育者の役割の重要な一つをはっきりと意味付け、保育者を勇気づけるこんな一節もある。

「生まれつきそなわっている子どもの『センス・オブ・ワンダー』神秘さや不思議さに目を見はる感性』をいつも新鮮に保ち続けるためには、わたしたちが住んでいる世界のようにこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が少なくとも一人、そばにいます必要がある」。

次のメッセージも、迷っている大人たちの目を覚まし、高く遠い視野に導いてくれるだろう。

「子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭を悩ませている親にとっても、『知る』ことは『感じる』ことの半分も重要ではないと固く信じています」。

いずれにしても「センス・オブ・ワンダー」。この言葉の響きの新鮮さ、爽やかさも、未来を予感させる。私たちもリフレッシュしなければ。

(新潟青陵女子短期大学)



保育者の世界の一断片

—— ミニアチャーの中でふくらむ想像力 ——

津守 真

子どもは小さなミニアチャーで遊ぶとき、大きな世界を想像し思考している。
ミニアチャーの世界は単に幾何学的縮小の再現ではない、その小さな空間の中に大きな世界がある。保育者は子どもと一緒にその世界で動く。

回る空間の開放

プロペラの回転にひたすら目を凝らしていたT夫が滑り台の下から上を仰ぎ見たとき、その世界は未来に向かって広がっている。T夫が滑り台を下から上に登ることに



成功して一週間後、彼はホールの隅の滑り台の上で私の膝に抱かれていた。突然T夫は自分でおりてきて、ホールの真ん中に置いてあるトランポリンのまわりを走るように私を誘った。私はリズムをとって走るとT夫は私を追いかけて走った。私をつかまえるためではない。走る喜びである。T夫はこれまで下を向いてトボトボと歩いていた。いま彼は笑っている。走ることは心を軽くし、開放する。リズムはそれを助ける。トランポリンが中心にあることもこれを助けた。通常の言語の用法にも、「走り回る」という。T夫は回るものに関心をもつだけでなく、走ることがこれに加わって、回る体験が解放的になった。

そのうちに自分でやめて、滑り台の上に私の手を引いていった。だれかが下からボールを投げしてくれた。滑り台の上で手を開くとボールは下に落ちる。いくつもボールを下に落とし、次にT夫自身が下に滑った。そしてふと庭に出て行った。

ミニアチャアの遊び

しばらく後、T夫は保育室の入口で、F先生と、ビニールをのばして斜面をつくり、指先を上下に動かして滑り降りる動作をしていた。先日滑り台の遊びをわきで見ていたF先生は、T夫がビニールテープを手をしているのを見たとき、この子の心にあの滑り台の上を仰ぎ見たときのふくらむ思いを見て取り、ただちにこれをミニア



チャアの想像力の次元に移したのだった。F先生がビニールテープをのぼして斜面をつくったとき、子どもはあのとときの滑り台の現実を内側から体験し直した。帰りがけに、T夫はビニールテープを手にもって自分で引き伸ばしていた。私はそれを持ち帰らせた。保育の最中に働かせる大人の想像力は保育を展開させる力である。

次の日、T夫は大きな換気扇と金属の枠、プロペラ、箱などを家から持って来た。母親は、宝物をみんな持って来たんですと言う。ホールの隅の滑り台の上で、換気扇を手で上に持ち上げ、天井をみつめてうなっていた。私は天井にそれをつけてくれと言っているのだと考え、苦心してビニールテープで天井に貼り付けた。T夫は滑り台の小さな空間の上方に、回るものつまり太陽をつくった。ミニチャアの宇宙の空間で想像力はひろがる。T夫は天井からぶら下ったテープを揺らして遊んでから自分が滑り降りた。

小さな積み木を垂直に立てるー再びミニチャアの遊び

更に二週間程後、T夫は家からプロペラとビニールテープを持って来た。庭で迎えた私は、ホールにはいるときに、一握りのレールと電車を持っていった。レールで斜



面をつくり、電車を傾斜におくと電車が滑り降りる。T夫はその電車を指先で滑らせるのを繰り返していた。私は少し距離をおいて向かい合わせに位置し、電車をT夫の方に走らせた。すると彼は小積み木を二本、柱のように立て、その間に小さな積み木を垂直に二個積んだ。ちょうど人間が柱の間に立っているかのようなのである。私はT夫が自分の表現をするのを見て、しめたと思った。垂直に立てた柱は、この子どもの中に自分から何かをしようとする意志が芽生えたことを示すものであろう。柱の間に立つのは自分かもしれない(図1)。

こういうとき、保育者のやりかたにふた通りあると思う。ひとつは子どものイメージネーションに沿ってこちらもイメージネーションをはたらかして遊びを継続することである。もうひとつは子どもの想像力が更に自由に解放されるように別の遊びを工夫することである。

このとき私は自動玩具を一杯持っているこの子の世界が開かれるのには、形のない物質の素材が必要と考え、絵の具と筆を用意した。私が筆に絵の具をたっぷりつけると、T夫はビンの中を筆でかきまわしてから皿と電車に絵の具を塗った。いくつも塗った。そのときはこれで終わったが、午後になって、T夫は庭の砂場で水たまりに電車を入

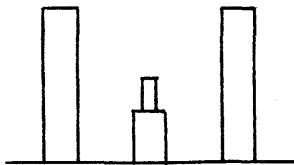


図 1



れ、その上から砂を落としていた。この日T夫は一度もうならず、プロペラも手に持たなかった。物質によって彼の心の枠がひとつ開かれたのではないかと思う。

その翌日T夫は一寸したことでパニックをおこしたり、何かとぐずり、朝から母親にくっついていた。私はいろいろと苦勞しながら一日を過ごした。午後になり、T夫は電車を走らせるのでなく、横に倒すことを繰り返して遊んだ。これはこの一日の過程の後に生まれたこの子のテーマのひとつである。自分の象徴ともいえる電車を自分の手で横倒しにすることは、垂直に立てることにひとしい意志のはたらきである。T夫は朝来たときから、私には分からない何かの理由で落ち込んでいた。電車を倒すことによって、彼は落ち込んでいた自分を表現していたのだろう。外から見ればそれはパニックと見える。

更に一週間後、T夫は大きな箱積み木を二本自分の体の両側に垂直に立て、自分がその間に立った。そして頭の上に絵本をおいて天井にし、両肘で積み木をバシと倒し、ケラケラと笑った。何度もそれを繰り返した。F先生は桃太郎の誕生だと言った。周囲にいた人

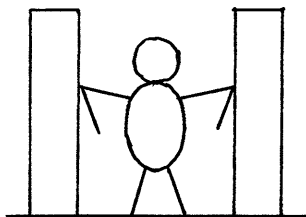


図 2



達は本当にそうだと思った。自分の殻を破ってT夫は広い空間に出て来た。T夫は大きな口をあけて笑った。このことについて別のところに記したが、これが可能になった過程には、子どもと保育者との両方にミニアチャーの想像力があつたのである。ミニアチャーの斜面上方への光を見出した子どもは、現実の世界ではさまざまな抵抗によって実現しえないことをミニアチャーの世界で展開させはじめた(図2)。

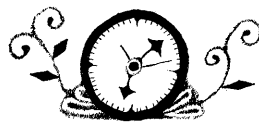
保育者が子どもと一緒に身をかがめて何かをしている。第三者には何をしているのか分からなくとも、子どもと保育者との間には豊かな想像力の世界がひろがっている。それなしには保育はないだろう。

(愛育養護学校)

注1 「まわるものへの関心」『幼児の教育』八十三巻三号(『保育の一日とその周辺』フレール館 一九八九所載)

子ども時代と私(3)

戦争と私



南 佑子

はじめに

私の子ども時代は良きにつけ悪しきにつけ戦争との関わりが強く、子ども時代の思い出はほとんどといていい程戦争につながっている。

幼少期の出来事は覚えていないことが多いが、母の昔語りと私の中にぼんやりと残っていたことが結びついて、鮮明な記憶として今も残っていること

もある。

しかし、後で述べる神戸大空襲の日のことは、あの悲惨な光景が忘れようとしても忘れられない強烈な記憶として、私の中にはつきりと残っている。

私は生後二か月で父親の転勤により中国の青島へいき、戦局の悪化と父親の広東への再度の転勤のため父を中国に残し、母と二歳違いの妹との三人で昭

和十七年七月日本に引き揚げてきた。

四歳であった私にはほとんど中国での記憶は残っていないが、当時日常会話に不自由しなかったという中国語は今では全部忘れてしまい、本当に勿体ないことをしたと残念に思っている。

幼稚園入園

昭和十八年四月「神戸愛児園」に二年保育児として入園した。この幼稚園は、幼児教育の先駆者倉橋惣三先生の著書『子供讃歌』の中に「彼の理論を育てた関西の保育者」として登場する望月くに先生が公立の神戸幼稚園を退職後、私財を投じて設立された園であった。望月先生は、母の幼稚園時代の恩師であったので、私を「神戸愛児園」に入園させたというのであった。倉橋先生の著書の中に出てくる「自然の中で生活し、自然に親しむ教育」がきつと「神戸愛児園」で日々実践されていたのであろう。

後年、望月先生と同じ道を専攻し、同じ幼稚園に勤務し、現在に至っている私は、このつながりの不思議と、ご縁の深さを思わずにはいられない。

戦時下の幼稚園

戦争は日に日に激化していたが、子ども達の生活はまだまだのんびりとしたものであったような気がする。

式の日には園長先生が羽織に勲章を付けて出席され、園長先生は偉い人なんだと尊敬の気持ちをもったこと、家から布団を持っていき、昼寝をしたこと等を覚えていいる。

登園の途中で馬力（馬が曳く荷車）に出会い、友達と乗せてもらって幼稚園に遅刻し、先生や母を心配させたこともあった。

当時の子ども達も歌が大好きで幼稚園や家庭で色々な歌を歌っていた。

「トントントンカラリツと隣り組、格子をあければ
顔なじみ、回してちょうだい回覧板……」

「お山の杉の子」は「大きくなって皆のため」今ではこう歌うが、私達は「大きくなって国のため」と歌っていた。

「空襲警報聞こえてきたよ、今は僕達小さいから大人の言うことよく聞いて、慌てないで騒がないで落ち着いて、入っていきましょう防空壕」この歌は余程何度も歌ったのかメロディーまで覚えてる。

「見よ落下傘空を往く……」七つボタンは桜に碇
……「見よ東海の空明けて……」

このような戦争にまつわる歌が多い。

もうすでに食糧難が始まっていたであろうが、私達はお弁当を持って幼稚園に通っていた。「欲しがりません勝つまでは、頑張りましょう勝つまでは、いただきます」お弁当時の挨拶はこうだった。

ブランコを力一杯こいだり、燕のでてくる劇をし

たり等、園長先生や先生方の配慮で当時許された範囲で、精一杯の楽しい園生活を過ごさせてもらっていたように有り難く思っている。

幼稚園から帰ってくると、妹や丁度隣に住んでいた従兄達と鬼ごっこやかくれんぼ等の遊びをした。

二階への階段の一段目に座って、一升ビンに入れたお米を、長い棒でトントんとつく精米も遊びの一つであった。

本を読むことが好きであった私は、母が紙がなくなるからと買い貯めてくれていた本を片っ端から読んだ。その中には幼児には難解な物もあったが、意



味も解らず文字をただ追うことで満足していたようであった。中でも親孝行な「白菊」という女の子が父親を尋ね歩く講談社出版の絵本『孝女白菊』が殊の外気に入り、涙を流しながら何度となく読んだことを覚えていて。いまでは死語になってしまった感もする親孝行の大切さを取り上げたこの物語から、時代の背景が窺えて面白い。

物心がつく前から戦争に遭遇していた私にとって絵本の絵や文章がどうしても現実と結びつかないことがあった。「マシユマロのような雲」と書いてあってもマシユマロを見たことも食べたこともなかった私には理解ができなかった。また、絵本に出てくる黄色いバナナと、たまにおやつに食べる真っ黒な干しバナナとが同じものであるという実感が湧かなかつた。因みに、本物のバナナを食べたのは戦後三年も経ってからのことであり、その時の感激は今でも覚えていてる程である。

戦争もだんだん敗色が濃くなっていくに従って、周りの環境が色々変化し始めた。爆風で破れないようにガラスには紙を貼り、夜になると灯りが外に洩れて爆撃の標的にならないように黒いカーテンをひき、電灯は黒い布で覆った。

「建物疎開」とは空襲時の延焼防止のため建物を人力で壊し、建物を間引くことである。

現在のような重機類を使用した解体ではなく、家に綱を巻き着け、何十人も大人が綱引きのように家を引っ張って壊すのである。子ども達にとっては格好の見せ物であったので、申し訳のないことだが「建物疎開」の行われる日は妹の手を引いてよく見に行った。

連合軍の飛行機が本土に近付くと「警戒警報」や「空襲警報」が発令された。当時の子どもはこの音を聞き分けることを日頃から訓練されていた。もう忘れてしまったが、戦後しばらくの間は、この音

に似た音を聞くと、気持ちが大不安定になったことを覚えている。

私が住んでいた家には昔ガレージに使っていた地下室があり、そこを防空壕として使っていた。

「警戒警報」が発令され、いつものように私は家族や従兄達と地下室に飛び込んだ。爆音を響かせ多数の飛行機が上空を飛んでいる様子が地下室の中で感じられた。

その時、防空壕の隙間から、真っ青な空に銀翼をきらめかせ、編隊を組んで飛んでゆく数十機のB29の姿が見えた。これが大人達という敵の姿なのか、本当に爆弾を落としてきたのだろうか、そんなことを考えながら、その美しさにしばしうっとりとして見られていた。

神戸大空襲

明日に幼稚園の修了式を控えた昭和二十年三月十

七日の寝入りばな、「警戒警報」に続く「空襲警報」にたたき起こされた。

その頃はいつ空襲があるか分からないということ、毎晩もんぺを着たまま寝ていた。母は私と妹が風邪ひくといけないともんぺの上に綿入れの半纏を着せてくれた。防空頭巾を被り、ゴムの長靴を履き、肩から救急袋を下げ、焼夷弾が落ちる中、母に手を引かれて再度山の中腹に急いだ。

道は油脂焼夷弾（エレクトロンと覚えているが間違っているかもしれない）で火の海であった。油脂焼夷弾というのは焼夷弾が落ちると油が一面に広が



り、そこに引火してあたりが火の海のようになるものなのである。

爆撃の標的を鮮明にするため飛行機から照明弾が落とされ、辺りは昼間のように明るかった。時折飛行機が低空に降りてきて、機銃掃射と行って飛行機から機関銃で逃げ惑う人々を撃つのである。

一緒に逃げていた人達が次々に倒れていく。怪我をしたのか血だらけの人を背負っていく人もある。

たまに日の丸をつけた飛行機が飛び上がってもすぐ黒い煙を吐いて落ちていく。その時誰かが「日本軍は何してるんだ」といった。

道の端に小さな溝があり、そこに多くの人がしゃがみ込み、伏せていた。「ここで三人で死のう」母は両脇に私達姉妹を抱え、上に覆い被さりながら悲痛な声でいった。死に対する恐怖感はなかったが、妹の歯が恐ろしさでガチガチ鳴っていたのを覚えている。焼夷弾が落ちる度に地響きがし、土砂や火の

粉が伏せている私達の上に降ってきた。

逃げ惑う人々の悲鳴、爆弾の炸裂する音、ザーという土砂の降る音、阿鼻叫喚の巷とはあの時のことをいうのではないだろうか。

その時、四歳になっていた妹が母の手を振りほどいて、突然火の海の中に飛び出していった。「良子一人死なすわけにはいかへん」母は悲壮な声を出してそう叫ぶと、私の手を握って走り出した。

全速力で走る妹に追い付き、三人で山腹にある防空壕に入り、空襲が終わるまでそこに隠れていた。

後で聞いた話によると、私達がしゃがみ込んでいた場所の近くに爆弾が落ち、そこにいた人達に多くの死傷者が出たとのことであった。

なぜ妹が急に火の中に飛び出していったのか今では誰にも分からない。何者かの力によって私達は生かされたのだという気がしている。

辺りが白みはじめた頃漸く敵機も去り警報も解除

になったので、私達は我が家に向かって歩き出した。

私達の髪の毛はところどころ焦げ、防空頭巾や半纏にも無数の焼け焦げがついていたという。

家の近くまで迎り着いた時、隣近所の家や我が家が燃えている最中であった。真っ赤な炎を吹き上げて燃えている家々を、消火も出来ないので近所の人達とぼんやりと見ているしかなかった。

「お雛さんが焼ける」飾っていたお雛さまを思い出し、恐怖感から解放された安堵感も手伝って、私と妹は大声をあげて泣いた。家が焼け落ちるまで泣き続けていた。

通っていた「神戸愛児園」もこの日の空襲で焼けてしまい、廃園になってしまった。

両親共神戸生まれの神戸育ちで、田舎をもたなかった私達は、焼け残った家屋に移り住んだが、そこも六月五日の空襲で焼けてしまった。仕方なく縁

故を頼って岐阜県の飛騨古川に疎開し、一年生になつていた私は、村の複複式（三学年一緒）の小学校の低学年クラスに転校した。

転校した当初は「疎開の子、疎開の子」とよくいじめられたが、その生活に慣れるにつれて友達も出来た。自然の中で楽しい遊びを次々教えてもらい一日中山野を駆け巡って過ごした。泳ぎを覚えたのもこの頃であった。

八月のあの日、いつものように山遊びから家に帰ってきた私は、ラジオを真ん中にして泣いている大人達を見た。尋ねてみると戦争に敗けたということであった。何故そんなに悲しいのかよく分からなかったが、その夜から電灯に黒い覆いをかけなくてよくなったことを知り、私にはそのことがたまらなく嬉しかった。

（神戸市立神戸幼稚園）

「こどもテレホン相談」から(5)

性は人間の絆の根源

小島 直美

電話相談も子どもの発達に伴ってさまざまな問題の移りかわりがあります。どんな内容でも、相談を受ける側の基本は困っている相手の気持ちを受けとめよく聴いて理解し、その人が自らの気持の中に困難に立ちむかっていける力が生まれることをお手伝いするということだと思えます。

その原則の中で、ふと迷いや困惑に陥るのが思春期の男の子からの性の相談です。今回は子どもの発達や人間にとって性とは、の視点もふまえながら電話相談における性の問題を考えてみたいと思います。

思春期の男の子からの多様な悩み

電話相談という仕事について初めの半年、全相談の三分の一近く、多い月は半分近くが性の相談でした。

・オナニーは体に毒ですか。

・包茎は直るんですか。

・女性の体のことが気になって頭から離れず勉強も手につかない。

・ガールフレンドとのセックスがうまくいかない。

・母（姉・妹・義姉）への性衝動が押さえられない。又、実際に性関係を持ってしまった。

・学校の女の先生をレイプしてしまった（隣のお姉さん、姉の友だちの場合も）。

・小さい女の子に自分の性器を見せたくてたまらない。

・女装に興味があり、男性にしか関心がない、

等々。

もちろんほとんどが男性からです。さらに相談として成立しない悪戯電話や堂々とテレフォンセックスを要求するものまであり、正直にいつてびっくりしましたし戸惑いました。

中には本当に悩んで、人に言えないことだしやっと思いきって電話をした、という相談もあるでしょう。情報ばかりあふれているのに自分の体には不安を持って中・高校生が多いのも事実だと思います。話を聴き、正しい知識を返し、さらに性を大切なものとして語りあえることができれば、と努めてもきました。しかし残念ながら、「性にまつわる話を誰か、しかも女性と話したい」「それに応える女性、又は女性の声そのものを求めたい」という感じの相談が多い気がしてなりません。それでもこちらがきちんとした対応で相談者の本心を読みとろうとしていくと、悪戯的常習の人がかけてこなくなっ

て、年々全体の相談に対する性の相談の割合は減っていきました。

性は生きていくための大きなエネルギー

そんな中で私なりに思春期の子どものたちの性への関心、揺らぎ、不安を聞いて強く感じたのは、やはり性は性そのものだけを語れることでなく人間の本質に深く深く関わっていることなのだろうということ

とです。フロイトのリビドー論はそれのみで人間の発達やすべてが語れるわけではないとしても、性が生きていくエネルギーに大きく関わっていることは実感させられました。思春期に“自分”に直面する時、体が大きな衝動をかかえておとなに変わっていくことにも深い意味があるのかもしれない



ん。性を興味本位としてしか扱わず、異性を欲望の対象としてのみ登場させる今の日本の“文化？”や風潮だけに影響されたり流されたりせず、相手と自分との関係を大切に尊重しあえる中で、きちんと性に向きあってほしいと思います。

性の訴えの背景に自分や家族の危機感が

思春期の子どもの達の相談以外でも母親等から性的ことが相談内容として寄せられることもあります。その多くは幼い頃の性器いじりの相談です。そしてほとんどが母親が子どもへの接触を密にし、他の方向の楽しいことへ関心が向けられていくと心配が解消されていくようです。しかし前述のように性を広い視野で考えていこうとする時、何かとても大きな問題を背景に感じさせる相談もいくつかあります。性が生きる力の源であると考えると、子どもがその根本を揺さぶることで自分や家族の存在の危機

感を訴えていると思える相談であり、そのいくつかを紹介したいと思います。

四歳女兒の父方祖母から

孫が「おちんちん」に異常にこだわる。特に母方祖父のおちんちんが好きと言う。おじいちゃん大好き、どこが、と聞かれると「おちんちん」と答える。お金がたまったらおちんちん買うんだ、と言う。

はじめ相談者は嫁の父親が異常なかわいがり方をしているのではないかと心配していたのだが、話を聞いていくうちにいろいろな背景がわかってくる。

この祖母は夫にはやく死なれ、女手ひとつで三人の息子を育ててきたこと、本児の母は精神の病を持っていること、その母は第二子（本児の弟）を片時も離さずに溺愛していること、従って本児は近くに住む母方祖母に育てられていること、その中で本児

の父（相談者の息子）

は仕事も忙しく家庭内でも出番がなさそうなこと、離婚話も出たことがあがるが、子どもがいることで別れずにいること、等々。

この相談は遠く離れている祖母からだだったこともあり、祖母の不安を受けとめ、一時間半にも及ぶ話を整理し、父親である息子の出番を促す方向に落ちつく。

一週間後、息子が父親として本児へのかかわりを密にしていこうとする意志を語ったとの報告や、本児も就園を控えて家族以外の人間関係の中で生活全体が豊かになれるとよいの期待が語られる電話があった。



小学校四年生女兒の母親から

最近本児が自慰行為をしている場面を頻繁に目にする。かなり叱ったのにやめられない様子。母は気になって「ひとりにしないように」買い物にも連れていっている。

母親の混乱した気持ちを聴き、嫌悪感を受けとめた上で性について母親と話しあった。母親自身が自分の女性としての体、生き方、結婚に納得がいていないことが語られる。さらに四か月前、母方祖父が倒れて母が看病に忙しかった頃、本児が母親の財布からお金を持ち出してマンガ本を何十冊も買って隠してあった。本児は誰からもいい子いい子と言われる子だった。三年生までは母と一緒に寝ていたが今はひとりで淋しがり、母に甘えてくることが多い。しかし母親は胸のふくらみかけた本児を心から甘えさせてあげられない。

母親の思いは複雑ながら、それでも今娘の出して

いるサインをしっかりと受けとめてみようとの意向が聞かれて相談が終わる。

小学校六年生男児の母方祖母から

中学受験に向けて猛勉強中。母親の下着を隠していた。中にはハサミで切られているものもある。受験勉強のストレスは承知だが、どうしてもがんばらせるしかない。本児も、「僕、絶対受かるからね」と言う。ひとりっ子で同居の祖母はかわいくてかわいくて年中、「みつめている」状態。お風呂でも背中を流してあげておちんちんは大事なところだからよく洗わなきゃだめ、と指導している。

一方で性に関しては祖母、母とも「いけないこと」のみの見方。本児に、変なことするとこわい病気になるよ、エイズは正しくないことをした人の罰の病気、と教えている。

相談員はこの祖母に「性は大切なこと、すばらし



いこと、やっかいかもしれないがきちんとつきあっていかなければならないこと」と、少しつこんだ思いを伝えてみた。

すると本児の母親が本児を生んだ後、“息苦しくなる”と性生活拒否していること、精神的にも適当に妥協して夫婦を繕っていることが語られる。目前の

受験を控え、課題を残した相談だったが横で聞いていた母親にはすっかり何かが伝わった感触が持っていた。

高校二年生男児本人から

三か月近くにわたって二十回の継続相談。いずれも三十分以上の長い通話。はじめの主訴は夜尿があること。しかしすぐに女子生徒のグループにいい

られていることが語られる。裸にされて写真を撮られたり、オナニーを強要されたり、暴言を浴びせられたりが継続相談中も数回起こる。はじめの頃は必ず無言電話を数回かけてからやっと会話のできる状態になり、しかも声は弱々しく、つらさ、悔しさ、憎しみさえ自分の言葉として伝わってこない。相談員は事実の信憑性に疑問を持ちつつ“吐き出した気持”を聴いていく。電話をかけてこられた勇氣、その中に自分で何とかしたい気持があることを支え、楽しいことなど何も無い日常、友だちもいなかったと語る彼の淋しさを受けとめていく。九回目の頃から様々な感情を表に出して訴えてくる。情けないと悔しさをぶつけ、つらいと電話口で泣きじゃくる。時には「ママァ」と叫びながら。そのうちに相手に対する怒り、憎しみを攻撃的な口調で語るようになる。その気持の流れを肯定しながらつきあっていく一方、現実の解決に向けての彼の気持の

動きを援助する。やがて女の子の友だちを得、その二人の協力のもと、保健の先生から担任の先生への連携で、いじめられている現場に先生がかけつけて事件が明るみに出た。相談員、女の子の友だち、保健の先生、と女性の援助の中で男として自信をつけていった。その過程は、四歳の時に父親と別れて母親のみに育てられ、その母親ともコミュニケーションの取れにくい生育史の中の欠けていた部分の補いになったのだろうか。

以上、性がテーマになった印象深い事例をふりかえってみて、私自身あらためて性の問題のむずかしさを感じています。

匿名で顔をあわせなくてもよい電話相談は、「言いにくいこと」として性にまつわる相談をしやすい相談システムだと思います。せっかく思いきって電話をしてきた相談者の気持を受けとめ、今起きてい

ることが言いにくいことかもしれないが決して恥ずかしいことではなく、本当はきちんと向きあうべき大切なことであると肯定します。相談者がまず性へのこだわりから解放されることで、子どもが性を手段に子どもとしてあたり前の、自分が暖かく受けとめられて生きていきたい欲求を訴えていることに気づいていきます。

それは、性は人間の絆の根源であり、その絆の中で自分の存在をありのまま認めてもらいたい当然の欲求なのだとおとにも教えてくれます。自分の命、人間として価値ある自分自身の存在、暖かく許しあえる人との関係、それらの根っこが「性」であると言えるのではないのでしょうか。

(元神奈川県横須賀児童相談所電話相談員)

「育ち」という言葉

竹内 順子

研究用語としての和語の増加について

近頃の保育や教育に関する論議のなかに、「学び」・「教え」・「気づき」・「働きかけ」・「支え」などの和語の用語が、学術的タームとして登場することが多くなってきた印象があります。なかでも「育ち」という語（「巢立ち」が語源といわれる）は、実践的な子ども研究において、研究者の

みならず現場の先生たちにもよく使われるようになってきたようです。「学び」に対しては「学習」、「気づき」には「感覚・発見」、「教え」は「教授」、「働きかけ」や「支え」には「指導」や「援助・支持」などの漢語表現が対応するようですが、それぞれかならずしもびったりこないのは、和語と漢語のあいだにある質的、歴史的、文化的差異に因るものと考えられます。保育や教育

の営みは、本来、衣・食・住と並ぶ「育」とい
う、生活上のありふれた日常的・基本的活動で
すから、「育」を語る言葉として、漢語にくらべて
よりやわらかで「土着的」ともいえる、生活や文
化のにおいの豊かな和語的表現が見直されるよう
になってきたのも、当然のなりゆきかもしれません。
このほかに、「出会い」というような、対応
する漢語的タームの見当たらない、新しい哲学的
視点を表す語もあります。「遊び」などは和語的
なタームのはしり（遊戯にかわる）といえるかも
しれません。

「育ち」という語の普及

さて、「育ち」という言葉ですが、これに対応
する漢語としては「生育・成長」、「発達」などが
あります。「生育」はどちらかというと生物学的
なイメージが強く、「成長」は読んで字のごと

く、形態的な増大を直観させる言葉です。一方の
「発達」は、生物のみならず、例えば社会、文化
の様式や技術などの、低次元から高次元にいたる
展開過程について表現する際にも使われる概念で
す。しかし、人間の発達について語る場合は、従
来の心理学という学問が形成してきた発達観・人
間観が色濃く反映しているといえるでしょう。

子どもの保育にかかわっている人にとって、
「発達」という言葉はどのようなイメージのある
言葉なのでしょう。ある保育園の先生が次のよ
うに発言されるのを聞いたことがあります。「発
達というのは確かに大問題で、発達段階のことを
考えて指導案をたてたりはするのですが、むしろ
『育ち』ということばの方をよく使うようです。
『育ち』が見えにくくなったときに、『発達』が
問題になるようです」と。ここから感じられるの
はまず、「発達」という言葉が現場ではあまり

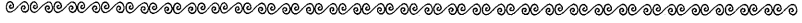


しっくりこない部分があるらしいということですが。「育ち」という語を使う研究者も、ほとんどが実践的な保育にかかわる場をもち、そこでの生きた現実をどのように研究という異次元の作業に結び付けようか問いつづけている方が多いのです。

このように保育の実践と省察のあいだに立たされている人によって、保育中に子どもから直観する「発達のなにか」と、当の「発達」という従来の用語とのギャップを埋めるものとして採用されたのが「育ち」だと考えられます。「発達」という言葉では表現しにくいと感じている実践的な実感を、「育ち」という用語で暗示しようとしているような意図さえ感じるので、その意図がどの程度意識的なものかはわか

りません。しかしそれが使いやすさに流されないように、そして保育者たちの間柄でないと通じないような閉鎖的・セクト的な用語とならないように、自覚的に使われる必要があると思われま

す。ここで、最近の「育ち」という用語の急成長について数字で示して置きましょう（表参照）。まず国内で出版されている和文図書（主な学術機関・国会図書館所蔵）のタイトルのなかに、「育ち」という言葉がどのくらい見られるかについて、データベースから検索してみます。表内の数字には、「氏より育ち」に見られるような、遺伝や家柄などとの対照語として語られる「育ち」は省かれています。また「東京育ち」などの、場所やそれに類するものを付したものの、人間以外の生物に関するもの、そして名詞形でないものも除外されています。すると結果的に、算定された図書はすべて保育関係の文献で、その数は一九八〇年



代、特に半ば以降徐々に増加していることがわかります。次に、日本保育学界の研究発表論文のタイトルにあらわれる、名詞形の「育ち」という語の数をみてみます。すると、やはり八〇年代半ば、特に八九年以降の増加傾向がみとめられるのです。

「育ち」と「発達」

近年の比較発達学や乳幼児心理学では、乳幼児を「刺激の受容体」として見る見方から、周囲の環境にみずから働きかけていく主体的な存在として認めようとする傾向があります。保育学の分野でも、子ども観はこの方向にすすんでいます。つ

[表]

出版図書		日本保育学会 研究発表
1	1894	—
0	1947	0
1	1948	0
1	1949	0
1	1981	0
1	1986	1
1	1987	0
0	1988	0
3	1989	2
7	1990	2
6	1991	2
3	1992	3
1	1993	2
3	1994	3
5	1995	5
—	1996	7

まり子どもは「育てる」よりも、まずみずから「育つ」存在であって、大人はその育ちを援助し支えていく者としてかわるのだ、というあらたな発達観に変化しつつあるといえるでしょう。この変化が八九年、九十年の幼稚園教育要領、保育所保育指針の改訂を支え、同時に「育ち」という用語の増加を動機づけていると思われます（もともと、「要領」や「指針」には、名詞形の「育ち」という語は使われていません）。

最後に、「育ち」という用語の使用される文脈的な意味と、従来の「発達」という言葉が持っているイメージの意味との違いについて考えてみましょう。

関係性・相互性

「発達」という概念は、近代科学的な心理学のなかで成長してきたために、研究主体と対象との関

係を切り離す方法で探究されてきた歴史を負っています。ですから「発達」について語るには、子どもという対象を標準化、数量化などの手法で、大人の主観からできるだけ遠ざけなければならぬような一般的イメージがあります。これに対して「育ち」は、保育実践になんらかのかかわりをもつ人たちに使われていることが多く、子どもとのかかわりを通して、主観を大切に切り抜おうとする傾向が読み取れます。また、「育ち」の一部分には、子どものほかに、母親や学生、保育者などの主体が比較的自由に組み込まれます。「母親の育ち」にくらべて「母親の発達」と言う違和感があり、意味も不鮮明なのではないでしょうか。保育を通して子どもどうし、また大人の保育者も共に育ち合うという、相互的な発達観が「育ち」（あるいは「育ちあい」という語で表現しや

すくなっているようです。

時間性・空間性

出発の「発」と到達の「達」を合成した「発達」という言葉は、起点から終点への直線的で、等間隔目盛りのモノサシ的な時間軸をイメージさせます。「発達目標」という終着点(ゴール)や、「発達段階」という目盛りがその上に書き込まれているのです。一方「育ち」を見つめる者は、子どもが生活している現在に巻き込まれて、刻々と子どもの現在に立ち会う位置にあります。ここで「現在」は均等割りの時間軸を前提にした、過去と未来にはさまれたというだけの消極的な瞬間とはちがいます。「育ち」に立ち会っている保育者の主観が、子どもの変化を「変わったな、育ったな」ととらえたときに、「育ち≡変化」としての時間が押し出されていくと見ることができるよう

ではないでしょうか。

また、「育ち」を語る人にとって、子どもと共通の場を体験しているということが重要です。研究者の主観を排除しようとする従来の「発達」的な視点では、子どもの近くにいっても、ビデオ記録や観察法などによってあえて仕切りをする手法をとって「客観性」を保持しようとしています。しかし、「空間の共通体験性」を逆手にとって、保育研究の新たな可能性のよりどころと考えるのが、「育ち」論者には特徴的です。



契機（人間観）

「発達」あるいは「育ち」という変化が何を契機にして発想されるのか、にも違いがあります。従来の古典的な発達観によれば、子どもの観察可能な行動を運動、知能、認知、言語、社会性などの各特質に分類し、それぞれについてのレベルを達成しているかで発達段階を判断するという、能力主義的な傾向が強かったといえます。これによると、たとえば障害のある子どもたちの「発達」は非常にいびつで、遅々とした消極的なものとして映るものになりがちです。しかし、彼らと共に保育にかかわっている者にとって、その子どもとしての全体的な「育ち」を見出すことが保育の支えになっているのが現実です。何ができるか、ではなく、存在感・能動性・相互性・自我の四視点に「人間が育つ」ことを見ようとする津守真氏の洞察は、「育ち」の用語の背後にある人間観を示

唆していると私には思われます。

「発達」の反対語としては「退行・停滞」などがあります。が、「育ち」では植物の「枯れ・朽ち」あたりでしょうか。Developmentは本来、もつれた糸のほどける様子を意味し、直線的なイメージのある「発達」という日本語とは趣を異にする言葉のようです。しかしこのDevelopment「前」の「糸がもつれている状態」は、子どもの「育ち」が見えないで、保育者が悩み迷い困惑し暗中模索している様子に通ずるような気がします。この「もつれ」が、ある瞬間ほどけて、急に視界が開けるようにして「育ち」が見えてくる。そう考えると、人間の中に発達性という本質をそもそも見出した頃の、発達観の起源は「育ち」的なものだったのかなあという空想が湧いてきます。

（十文字学園女子短期大学）

ある日の育児日記から

(69)

佐藤 和代



子どもにとって、一音節の言葉というのは難しいのでしょうか。うちの子は二人そろって「蚊」という言葉を覚え間違えたのですが。

圭はこれを、「かが」と覚えてしまった。「蚊がきた」「蚊が刺した」の「かが」です。で、「あ、またかがだ」なんて言うので「ちがうよ、蚊がきたの」「かが、きた」「ちがうって、蚊、なの」説明している私の頭もこんぐらがる。「蚊」と理解したのは五歳くらいかな。

今は四歳の有が同じ経過をたどっています。有は「かに」と覚えてしまった。「蚊に刺された」

の「かに」。今度は私より圭がやつきになって「かにじゃない、蚊に刺されるんだよ」「かに、さされるんでしょ」

「ちがう、蚊が刺すの」「かにが、刺す」圭はだんだんいらいらしてくる。親は何だか「かに」というのがかわいくて、放っていますけど。

同じような間違いを二人そろってするというのは多少普遍的要素があるのかな。「おてて」「おめめ」なんて幼児言葉も小さい子には「手」「目」では



保育園協定の手紙リマント。アフリケへ行ったら不評ど...

短すぎて覚えにくいから自然にできたのでしょうかね。

ところでこの前、神社の前を通ったら、有が言いました。「ここ行きたくない。いかがいるんだ。いか？何か間違えてないかー？」

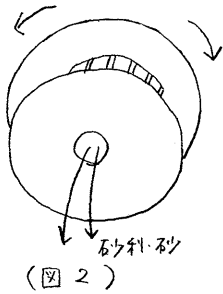
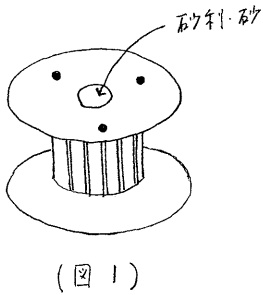
おかえりのひまわり

上坂元 絵里

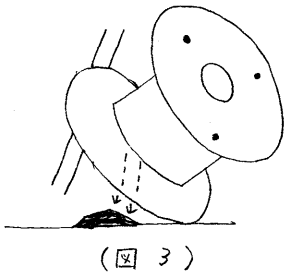
年長組の二月、卒園も近づくある日のことである。私達の園では、おかえりに各保育室を自分達で片付ける以外に、年長組は二組で分担して、園庭と遊戯室の、片付けの確認の役を担っている。年少児が片付けきれなかったところを補ったり、片付け忘れた遊具等を届けたりと、子ども達にとっては、大きい組であるという誇りをちょっぴり味わえる役割でもある。

この日は、海の組が園庭の片付けにあたった。この日の話題の主役は、工事用のケーブル等を巻く大型の木製糸巻(図1)だ。正式の名称はわからないが、一年程前、学内の工事の際に不要となったものを譲り受けて時期を見て園庭に遊具として置いてあった。大型は直径一メートル位のもの一個、小型は直径五〇センチメートル位のもの三個である。いつもは園庭の南西のぶどう棚の近くにおいて

あったのだが、海の組の男児四人が、大型のものを張りきって転がして山へ運ぼうとしていた。それは危ないと思い、小型の方へ変えるように伝え、その後、園庭中央のジャンブルジムの近くに横にして置いてあった。いつもと違う場所にあったことも、何か子どもを刺激するものがあったのか、年中の子ども達が、糸巻中央の穴から砂利と砂を一生懸命入れて遊んでいた(図1)。さて、片付けの段になりT男、M子、G男が「わあ、誰だ、こんなに入れちゃったのは」とあきれたような口調で言いながら、糸巻を起こそうとするが持ち上がらない。私も



駆けより、三人に同じ側に並ぶように言い、持ち上げようとすがびくともしない。私はあきらめて、テラスの方の片付けを手伝いに行く。それでもT男は「ねえ、皆集まって」と大声で呼びかけ、少したつと「持ち上がったよー」という喚声、ふり返ってみると何人かで前後に少しずつ転がして、中央の穴から砂利を出している(図2)。S男が曲乗りのように乗っていたので「上に乗るのはやめて」と声をかける。先ほど、私には動かすのはとても無理と思えたので、子ども達が力をあわせると本当にすごいと素直に驚く。しかし、しばらく転がすともう砂は



出てこなくなる。そこへいつのまにか、R男がバットをもってきて、片方の穴から砂利を押し出し、反対の側からもう一人が手でかき出すと少しずつ出てくる。ここでもR男の機転のきく発想に感心する。

最初は、頭から無理とみなしていた私も、この頃から子ども達の勢いに巻き込まれて、ジャングルジムの一段に、横にした糸巻の片側をのせ、斜めにしてみる(図3)。すると穴から砂利が流れ落ちてきて「わー、出てきた」と喚声があがる。しかし、今度は下にまた砂利がたまつて、落ちてくる砂利をせき止めてしまう。一度糸巻をおこすと、三人位がスコップ等をもってきて、たまつた砂利をよけてくれる。私は何も言わないのに、これまた素早い的確な行動である。もう一度、ジャングルジムに立てかけると、最初こそ勢いよく出たもののすぐに止まってしまう。私は、もう一度頭をひねり、いす三脚をM子、N子と運び、糸巻をその上にのせる(図4)。そして上の穴からバットでかきませて落とすように

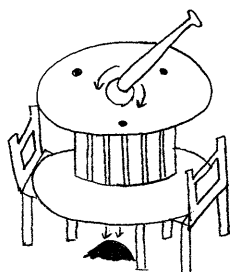
する。しかし、これでは子どもには届かない。やりたいというが、ちょっと危ない。

そんなところへ、年中組のI先生が、おかえりを終え、「ごめんさいね、さっきはどうしても片付けられなかったから、あとで私がやろうと思ってたのよ。ありがとう」とやって来てくれる。すでに降園時刻の五分前、内心かなり焦っていた私は「じゃ、あとはI先生にお願いしましょう。時間切れ」とかなり強引に言つて、引き上げさせた。

保育室へ戻り、ほぼ支度も整つた頃、「今日はとても大変な片付けがあつたけれど、皆で一生懸命やってくれたのよね。I先生も一人であつて片付けようと思つていたのでとても喜んでらしたわ」と言うなり、バタバタと数人が扉へ走りよる。片付けの続きをしていたI先生に、R男が「I先生、頑張つて」と叫んだ。他の子ども次々に声をかけ、私の隣に座っていたS子は、私に「R男ちゃん、優しいね」とささやいた。

糸巻の中の砂と砂利は、ジョウロで沢山水をかけてあったため、重くぎっしりとつまっていた。これとはとても無理と保育者は判断していた。降園時間が気になっていたということもある。だが、皆に集まるよう声をかけたT男は、クラスの中では人間関係に苦勞している子どもであった。T男が率先して動く姿に「あれっ」と思ったり、必死で何とかしようとする子ども達の様子に、いつのまにか保育者も引き込まれている。保育者自身、本当に短い時間に必死で考え、行動していたと思う。

この降園前のひとときにも、子ども達のいろいろ



(☐ 4)

なやりとり、科学的に原理をとらえた工夫、機敏な行動等本当にいろいろなエッセンスが含まれていたと思う。

R男のやさしい言葉には、自分も一生懸命やったその後で、一人で奮闘するI先生の大変さもわかる気持ちがよくあらわれていた。それを受けとめる周りの子ども達の気持ちも嬉しいものだった。

いつもの私なら、焦って、「もうおかえりの時間だから、先生がやっておくからね」と言いかねなかったと思う。保育者の中の心の動きの、紙一重の違いで、保育の中で生まれることは大きく異なる。そんな思いを改めて深く感じ、あの時、あの対応をしたおかげでいろいろな事を感じられたことに感謝するような出来事だった。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

四季の庭・四季の道

花色あそび

浅山 英一

ふしぎな花の色

花の種類は多くその色は千差万別です。とくに自然が私たちに与えてくれた花の色は文字通りいろいろで美しい限りですが、これを見て花はきれいだと言っているだけでは惜しいことです。

どうしてこんなに美しく見えるのか、その色素はどこから生まれてくるのか科学的にしらべることは小さな子どもたちには無理なことですが、花びらをとって押し花にしてみたり、花びらを画用紙にぬりつけてみたりして子ども心にも不思議なことだと思ふ体験をさせておきたいものです。

花の色と酸とアルカリ

花の色が、酸とアルカリの割合によって変化することはよく知られているのですが、その前に花の色がどんな色素から成り立っているかを知っておくことが必要です。花の色を構成している色素を大別すると三つのグループになります。

アントシアン色素 花青素とも呼ばれる色素で花色をあらわすペラルゴニン、シアニン、デルフィニンなどその他から成り立っています。大体においてペラルゴニンはゼラニウム、サルビア、アサガオ、ダリアなどの紅い花にあらわれ、シアニンはヤグルマギク、紅紫色のバラやシャクヤクなどにふくまれ、デルフィニンはパンジーの青、デルフィニウム、ナスビの皮、リンドウ、ツユクサなどの青系統の色にふくまれています。

フラボン色素 淡い黄、濃い黄色の色素でアントシアンと共存することが多く、細胞の中では各種

の糖と結合し

ていて水にと

ける性質です

が、また酸と

アルカリで花

色の反応がち

がうことはア

ントシアンと

フラボンの共

通した性質です。

酸性では紅くアルカリ性では青く変色し、中性

では紫色になります。

カロチン色素 一口にカロチン色素といいますが、黄色やオレンジ、時には紅にあらわれる色素

でたくさん種類があり、水やアルコールには溶

けにくく、ベンジンやエーテル、油脂にはよく溶

ける性質です。また酸やアルカリにはその色は反



応じません。

花色あそび

花の色素を化学的に解明することは専門の分野に属しますからさておき、ここでは子どもたちと一緒に紅い花、青い花、黄色な花、とりどりの花色で画を描いてみることにしたいと思います。

石鹼と花の色

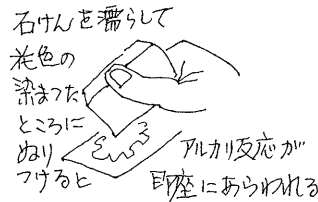
紅い花が青くなる 花壇やプランターに咲きあふれている紅やピンクの花を一輪とって、白い画用紙の上に指先で押し潰してみてください。キクやガーベラのように硬い花びらよりダリア、カンナ、アフリカホウセンカ（インパチェンス）などの水分が多くてやわらかい花びらのほうが紙によく染まります。まだ庭にアサガオが咲いているようにでしたら開いた花を午前中につみとるのがよい

でしょう。

紙の上ではそれらの紅い花はすぐうす紫に変色して生の花のようになきれいではありません。これは紙がつくられるときに使われた苛性ソーダがいくらか残っているからです。

しかし気にしないで用意した石鹼を少し水で濡らして染まった花色の上を塗りつけてみると不思議やその花は美しい青い色に変わります。

紅い花といってもピンクもその一種ですからその変色は花の種類によって濃い青から淡い空色などいろいろとちがいますが、春に咲くプリムラ・マラコイデスやプリムラ・オブコニカなどの花は石鹼を塗ればとても美しい色に変わります。



す。紫色といってもフジの花、ミヤコワスレ、アサガオなどその個体によって濃淡のちがいがあ
るので白紙にあらわれる青さもいろいろです。

黄色い花

自然界には黄色い花もたくさんあります。

ヒマワリ、キク、キシヨウブ、タンポポ、ルドベキア、パンジーなどと、春にも夏にも秋にもどこかで黄色の花が咲いているのを見かけます。

その色素は主としてカロチン色素で、アルカリ反応がありません。ですから押し花やドライフラワーとしても黄色がいつまでもそのままに残っている安定した色素なのです。

白紙に黄色の花を塗りつけて石鹼の液を作用させても変色しないのです。

花の種類によって、チューリップやヒヤシンス、などのように一種類の花でも紅や紫などのい

ろいろの色に出

るものがありま

すが、その中の

黄色の花はカロ

チン色素を含ん

でいるものとみ

て差支えありま

せん。

例外として目

には黄色に見えても性質のちがった未知の色素をもっている花もありますから、これまたおもしろい結果があらわれます。

未知の色素を含む黄色の花

またところカロチン色素による黄色の花と全く区別のつかない花ですが、次の種類は、白紙に染めた黄色に濡れた石鹼を塗りつけると、たちまち美しい紅色に変わります。カルコンという色素を



スイセンやマリゴールド
黄色はアルカリ反応があらわれ白い

白い花

白い花には色素がありません。白く見えるのは雲が白く見えたりビールの泡が白く見えるのと同じことで、花の細胞に光が乱反射するので白く見えるだけのことです。ただしフラボンの前提色素が含まれているのでアルカリ反応は淡いクリーム色になります。

黒い花

花に黒い色素はないのですが、青や紫、褐色などの色素が集合したものは黒く見えるだけのことです。黒色のパンジーや何色のパンジーでもかまいませんから黒目の部分を切りとって白紙を染めアルカリ反応を見ると鮮やかな青藍色になります。これはアントキアン色素の中にシアニン色素が入っているからです。

茶色の花

茶色やチョコレート色に見える花は花びらの細

胞液に紫色のアントキアン色素と黄色のカロチン色素が混じっているからです。これらの色の混合した花びらは時にセピア色や黒褐色に見えることがあります。

以上、石鹼を使ってアルカリ反応を利用しましたが、さて、酸としては何を使うか。それはもともと無難なのは市販の酢酸を適宜水にうすめて使います。クエン酸や食酢でもかまいませんが約三パーセントですからやや弱く、他に別の成分も入っていますから酢酸がよいのです。塩酸や硫酸は幼児には絶対使わせてはいけません。

(園芸研究家)

『十里霧中』

——息子たちのイギリス公立校体験記(5)——

豊田 一秀

同じように「公立校」という言葉で表してみても、日本とイギリスでは当然ながらその制度、内容は大きく異なる。多くの本が(注1)イギリスの学校制度について専門的に紹介しているので、ここでは詳しく述べないが、雑駁に述べれば、イギリスの方が校長及び地域の権限が大きく、学校の独自性を発揮しやすい構造になっていると言えよう。

しかし、そうは言っても中央からの監督がないという

訳ではない。一例として、各校は四年に一回の割合で視学官による学校調査(SCHOOL INSPECTION)を受ける。この結果によっては極端な場合、学校を閉鎖することを諮問される場合もあり、学校当局にとっては緊張する調査である。今回は、ちょうどこの調査が息子たちの学校で行われたので、調査の様子と結果を一父兄の立場からお伝えしたい。

もう一つは、学校主催のファッションショウの報告で

ある。これは生徒が即席のモデルになって学校の講堂で行われたショウで、生徒も楽しみにしていたようである。目的は例によって、学校への財政的援助であるが、当日は、何と先生方もモデルとなって登場し、ショウを盛り上げていた。この行事は、学校の持つ独自性の一例として見ても興味深いものと私には思われた。

学校調査とファッションショウ、硬軟二題としてお伝えしたい。

毎月、学校から発行される「校長便り」の十二月号に、一月にスクールインスペクションと言われる学校調査があることが書かれてあった。それによるとこの調査は、教育水準局（OFFICE FOR STANDARDS IN EDUCATION）が行うもので、複数（息子の学校の場合は十名以上）の調査官によって一週間にわたり続くそうである。調査の内容は、授業計画、授業の内容、教師の教授法及び技術、生徒の学習態度、生徒の学習到達水準、学校運営、生徒、教師、保護者、理事会へのイン



▲生徒がモデルになったのファッションショウ

タビュー等、多岐に渡る。そして、その調査の結果は書面で開示される。そこで指摘された問題点に対して、学校理事会は四十日以内に改善策を具体的に書面で示さなければならぬ。

手紙はさらに、調査に先だって、ある夕に全校の保護者と視学官との懇談会があるので参加して欲しいと書かれていた。後日、この懇談会の議題と保護者へのアンケートが各家庭に送られてきた。議題の下には出欠の確認書が付いている。多くの保護者がこの懇談会に出席すること、それ自身が学校に対する親の「関心」と「協力」を視学官に示すことになるという訳である。学校がこの調査に対してかなり神経質になっていることが感じられる手紙であった。

アンケートの内容を見てみよう。質問は全部で十七の項目からなり、これらに丸を付けて答えて行く形式である。答えは「賛成」「不賛成」の項が、それぞれ更に「強く」「穏やかに」の二つに分れ、計四種類の中から選べる。

*

- 1 私は学校の教える価値と態度に対し満足している。
- 2 学校は良い行動の水準を維持している。
- 3 学校は生徒の登校を保障すべく良く機能している。
- 4 学校は保護者が学校の活動に積極的に参加できるように励ましている。
- 5 私は自分が学校に暖かく受け入れられているように感じている。
- 6 私は各教科の教師と連絡を取っている。
- 7 学校は特別に配慮を必要とする (SPECIAL NEEDS) 生徒に対し充分に応えている。
(あなたの) 一番上の子どもに対し
- 8 私は子ども学習の水準に対し満足している。
- 9 私は子どもが行っている学習について良く知らされている。
- 10 私の子どもは適切な援助と指導を学校から受けている。
- 11 私は子どもと与えられる宿題に関して満足している。
- 12 私の子どもは学校で幸せである。

(あなたの)一番下の子どもに対して、質問13、17
質問内容は8、12と同じ。

*

当日、夜七時半から講堂で行われた懇談会に参加してみた。因みにイギリスでは、働いている保護者を配慮してであろうか、親を呼んでの会合は夜に行われることが多い。

四百人近い出席であっただろうか、講堂は満席である(生徒数は全校で一四一二人である)。この調査の目的、方法など十二程の議題に添って、視学官である博士号を持った女性が議事を進めて行く。決して威圧的な感じはなく、スマートな会合であった。各議題の後に質問を受け付ける。こんな時、場合によっては学校に対する普段からの不平、不満を保護者が視学官に直訴するという雰囲気になる可能性もあると思うのだが、各項目に対する保護者からの質問も、その数、内容、共に自然で、場に即した建設的なものばかりであり、イギリス人の議事の進め方の巧みさに内心感心させられた。

さて、一週間に渡った調査の実態については、私は実際に学校でそれを見た訳ではないので、紹介できないが、子どもの話によると、大方の学校の様子は普段と少しも変わらなかったようだ。ただ、先生たちがいつもよりは少しやさしいような感じだったと話すのには笑わされてしまった。先生もつらいところである。

数週間後に、視学官からの調査の結果の要約が学校より各家庭に届けられた。大方は肯定的な記述が多く、「こういう書き出しの報告書は今までに見たことがない」と校長先生はご機嫌であった。少し長くなるが、この報告から逆に視学官が何をしようとしていたのかが分かるので、大要を述べてみよう(本物の報告書は四十ページにも渡るものである)。

*

ハワードオブエフフィンガムスクールは良い学校である。キイステージ三(注2)の生徒の四分の三、及びキイステージ四(注3)とシックスフォーム(注4)生徒

の内八十パーセントが全国の期待値を上回る達成を見せている。大多数の生徒は期待値以内に達し、三分の一の生徒は高い到達を示している。Aレベル(注5)、ASレベル(注6)、及びGCSE(注7)において全国、及び州(COUNTY)の平均を大きく上回っている。この学校はGCSEの結果においてサリー州におけるトップグループである。大多数の生徒は昨年の職業テストにおいて合格している。全国一般職業資格の結果は素晴らしい。

全ての生徒は、良くバランスのとれた広い範囲のカリキュラムを受け、特別教科、特に音楽、ドラマ、制作、体育において良い機会を与えられている。生徒の学びの質は、全ての段階において九十パーセント以上が良好かそれ以上である。

教師の専門的知識とクラスの良い関係は教育全般に大きく寄与している。キイステージ三、四の八十パーセント以上、シックスフォームの九十パーセント以上の授業は良好、またはそれ以上である。いくつかの授業におい

て、これに当てはまらない場合が見られたが、それは、しばしば、生徒を授業に向かわせるのに教師が多くの時間を使い過ぎているためである。

特別の配慮を必要とする生徒の内の多くと、英語を第一外国語としない生徒の学習進度は遅く、適切な狙いに即した指導が常にされてはいなかった。他の学年に比べ、七年生(注8)における情報技術の授業は、全国カリキュラムにおいて要求される授業がされていなかった。多くの場合において援助的な場面も見られたが、一方で、いくつかの場面において進度に不必要なガイダンスが与えられたり、全国カリキュラムのレベルに即していない学習が見られた。

理事会と有能な事務職員によってサポートされた校長の効果的且つ強力なリーダーシップは大いに学校運営に寄与している。適切な将来計画は周到な財政的な運用に因っている。新任教師に対するサポートは良く為されている。理事会は、特別に配慮を必要とする子どもたちのための授業、情報技術、及び図書館の教育過程に沿った運営

に関して、適当な計画を立てていなかった。学校は支出に見合った教育を供給しているが、学校の管理運営に關してもより重点的な支出を計るべきである。日常の学校の運営は良好である。

学校全体の關係は良好である。生徒たちは主体性を發揮する機会を持っていると同時に、健全な道德的教育を受けている。各キイステージ及びシックスフォームにおいて、宗教教育の時間に精神的教育を受けているにも係わらず、生徒たちはカリキュラム通りの宗教教育を受けていない。(例えば) 全校集会は生徒の精神的、道德的發達に貢獻するものであるが、学校は要求されるような日々の合同礼拝を行っていない。生徒指導、及び進路指導は良く機能している。学校への保護者の援助は広範に渡っている。

*

このような指摘が続いた後、この文の中に見られた問題点を八つの項目にまとめ、学校側に改善を勧告している。

この結果の報告の約一か月後の「校長便り」に、この八つの改善勧告に対する学校側からの改善計画が具体的に提示された。紙面の關係で詳細は省くが、実効を伴った一つの大きなプロジェクトとして興味深く感じた私であった(そして、更に一年ほど後に、実際に改善されたかについての監査が行われるという)。

ところで、この報告書を読んで感じられることは、第一に、調査会が生徒の学力に關心を強く持っていることである。そして第二に、全国カリキュラムに沿った授業がなされているかを見ようとしている。日本から見ればこの二点は極、当然のことと考えられるかもしれないが、イギリスには一九八八年までは全国カリキュラムは存在しなかったのである。そして、このカリキュラムの誕生には、イギリスの子どもの学力を少しでも高めて、国力を盛り上げようという祈りが込められている。イギリスはある意味において、日本的な教育を目指し始めていると言っても良いかも知れない。日本の教育が地方分権化、個別化、多様化に向けて動き始めている事を考え

ると、両者のベクトルを私は興味深く思うが、そもそも、お互いの出発点が余りに離れているので、そう簡単には両者が交わることはないであろう。

最後に特筆すべきは、特別な配慮 (SPECIAL EDUCATIONAL NEEDS) を必要とする生徒に対する調査会の眼差しである。一四一二名の全校生徒の中にいる七名の子どもへの配慮が足りない、調査会は強い調子で改善を勧告している。この事からも、教育の社会均等と個性の尊重を具体的な形で重要視していることが感じられた。七人の生徒の内二人は、間違いなく我が家の息子たちなのである。有り難いことだと感謝した。

次に話題を変えて、学校の講堂で行われたファッシュショウの様子をお伝えしよう。これは初めにも書いたように、学校への財政的援助を目的とした一つの行事である。

約一か月前に学校からお知らせの手紙が届く。入場料は一人五ポンドで、ショウの合間にシャンパンのサービ

ス！もあるそうである。因みに、五ポンド (約八三〇円) という額は学校のこの手の行事としてはかなり高額の方である。急いで前売券を予約する。子どもたちの話によれば、学校ではモデルのオーディションもあって、生徒の間でも前人気が高いようである。ショウの前日になると、即席モデルたちが赤や緑に髪を染めて登校し、生活指導の先生が苦笑いしていたと子どもたちは面白そうに話していた。何しろ学校の財政援助という「印籠」を彼等は持っているのである。当日、ショウは夜の七時からである。家族四人で出かける。受付には、ブラックタイで決めたシックスフォームの生徒が並んでいる。メイキャップを済ませたモデルたちも、出演前だというのにロビーに出てきてしまい、ウキウキした雰囲気はまるで学芸会のそれである。男女ペーアの若い先生の司会でショウは始まる。ステージの飾りつけ、音響、照明、スモーク (舞台効果の為の煙)、もそれぞれに工夫があつて、この会へ向けての熱意が感じられた。各テーマに沿って何人かずつの男女モデルが登場してくると、仲間

からの拍手は一段と高くなる。誇らしげな、そして恥ずかしげな動きが可愛い。結構、振り付けの練習もしたのだろう、仲間と振りを合わせたたりして、なかなかモデルらしい動きである。肝心の衣裳は町の洋装店の協力で貸してもらったものである。その他、メイキャップも町的美容院の大きな協力を得ている。両店にとっても将来の良い顧客になる可能性大なのである。ショウ最後のテーマは「ジェームズ・ボンド」、なんと先生方の出演である。タキシードに濃いサンングラス、数学の先生のボンドは最近のション・コネリーのようで決まっている！女性の先生たちと優雅にステップを踏む。次に、校長先生が両側の女性の先生と腕を組んで登場すると拍手は一段と大きくなった。先生方もモデルを結構楽しんでいよう、それがまたその場を和やかに盛り立てている。勉強以外の事で生徒と親、そして教師が楽しい時を自然に共有している。そこには学校臭さ、教師臭さを感じられない。これは地域社会が熟していないとなかなか出来ない事であろう。当然ながら決して豪華といえるような



▲先生方のモデルはさすが堂に入っている

ショウではなかったが、シャンペンの心地良い酔いも手
伝って、私たちは暖かい気持ちで家路についた。

ところで、この行事の企画、渉外、運営、設定、練習
などを考えると、一か月以上の月日と多くの生徒、先生
のエネルギーが使われたに違いないと思われる。そし
て、なんと、このファッションショウの翌週からは年度
末の大きな試験週間が始まるのである。こんな時期にこ
んな事をしていいのかな——、等と独り言を言ってい
る私でもあった。

オット！ 日本の親臭さがまだぬけていない。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)

注1 例えば、以下の本などに詳しい記述がある。『変わりゆ

くイギリスの学校』志水宏吉著、東洋監出版社・『子ど

ものための学校』稲垣忠彦編、東京大学出版会・『パブ

リックスクール』竹内洋著、講談社現代新書

注2 イギリスでは義務教育期間(五歳から十六歳)を大きく

四つのステージに分けている。キイステージ三とは十
一歳から十四歳の間のステージをさす。なお、本誌二
月号第三回連載において、イギリスの教育制度の図表
を掲載したので参考にされたい。

注3 同様に十四歳から十六歳のステージ。

注4 日本に置き換えれば高校に相当する学校で、期間は十六
歳から十八歳までの二年間である。

注5 Advanced Levelの略で高校の過程。Aレベル試験は高
校を終了した時点で受ける国家試験。この成績で大学
への入学が決まる。

注6 Advanced Supplementaryの略で、Aレベルの半分の
教授、学習時間で習得出来る。

注7 General Certificate of Secondary Educationの略
で、義務教育を終了した時に受ける国家試験。高校へ
の資格試験でもある。

注8 十一歳、中等教育の一年生にあたる。七年生から十一
生までが日本の中学生に相当する。

タペストリー

松井 とし



子どもたちと「おりもの（織物）」とよんで楽しんだ手仕事がある。

フレミッシュ織りの基本を習った時、子どもたちも楽しめそうだと思い付き、やさしくアレンジしたもののだが、毎年子どもたちが熱中した。油絵のキャンバス用の小さな木枠の上下に頭の丸い真鍮釘を打ち込み、よりの強い細めの毛糸を縦糸に張り、よりのあまい太めの毛糸を横糸にしてジャンボ綴じ針で、一目おきにすくっていく。織物とは言っても簡単なものだが、縦糸と横糸の組み合わせ方によって、一人ひとりの個性が織り出され、なかでもきれいな色が連なる変わり糸を横糸にした時に生み出される色合いは美しかった。

織物ブームが広まり、次第に家庭からもいろいろな毛糸が集まってきた。A男はその中に色変わりの細い毛糸を目ざとく見つけ、縦糸に使うと言ってきた。その時の私の反応は

内心疑問符のついたものだった。ところが出来上がってみると、予想もしなかった美しいチェック柄が表れた。

一目すくいを規則的に続けていくと、美しい平凡な畳編み。それが不規則になった時おもしろいデザインになる。甲にえくぼの残る子ども小さな手の運びが、自分の意志とは関係なく不規則なるものを生み出すのだが、B男は満足して「これでいい」と外へ出かけて小枝を拾ってきて差し、素晴らしい壁掛けを作った。この時も私は、常識にとらわれ固くなった自分の感じ方を恥じていた。頭では分かっているつもりでも、私の心の隅に規則的なものは規則的にできる方がより望ましい、などという価値観があったのだと思う。

クリスマスを楽しみに待つ頃の壁に、出来上がった色とりどりの織物をピンで止めツリーを飾った。さらに作品が増えた時、麻糸でつなぎ合わせて壁いっぱい大きなタペストリーを作った。まさに十人十色、一人ひとりが心をかたむけ、時間をかけて織り出した充実。その充実をつなぎ合わせると、思いもかけなかった新たなものが生み出され、みんなで見入った。はからずも個と集団の関係を象徴的に表してくれたタペストリーだった。

ささやかな織物作りを通して、黙々と手を動かしていた子どもたちの姿から気付かされ、教えられたことは、今なお深く心に刻まれている。

(元幼稚園教諭)

外国の文献から

『心情と知性の教育』

—日本の就学前と小学校教育に関する考察—

第二章 幼稚園での経験——遊び・コミュニティ・反省

渋川 明日香

幼稚園のカリキュラム——遊び中心

日本の幼稚園での調査を始めるとき、筆者は整然とした教室と教師主導の活動を想像していた。しかし実際は全く違った。

調査した十五の日本の幼稚園では、五歳児は一日の半分を自由遊びで過ごし、半分はクラス全体

の活動をしていった。十五の幼稚園での時間配分は、五十パーセントー自由遊び、十四パーセントー図画工作、八パーセントー歌、ダンス音楽の練習、七パーセントー行事または集まり、七パーセントーお昼またはおやつ、五パーセントーお話の時間、五パーセントー掃除、一パーセントー学習活動、である。

自由遊びはわざわざ日本に來なくても見ることができるとある。しかし、自由遊びは単に楽しく過ごすだけの時間ではないということにある時気づいた。日本の就学前教育の目標——子ども同士の関係を育て、集団の中で生きる意欲と能力を築くこと——に、自由遊びは重要な材料を提供しているのである。

コミュニティ作りのための自由遊びの利用

子どもは遊びの中でお互いに知り合うようになる。日本の幼稚園の教師はこのような自然な接触

をクラス全体のコミュニティ作りの足場として利用している。例えばある幼稚園では、数人の五歳児が自由遊びの中で紙の時計を作ったとき、教師がそれに注目してクラスの集まりで他の子どもたちに見せるように言った。次の日には時計を作る子どもが増え、子どもたちはたくさんできた時計を「売る」ことをクラスの集まりで提案した。その次の日、クラスの多くの子どもが「時計屋さん」で時計の売り買いをしていた。そして集まりの時に、年少クラスを「お客さん」として招く。「時計屋さんデー」の計画が作られた。次の数日間には渡って子どもたちは時計を大量に作り、店、お金、「お客さん」のための財布なども作った。この活動の始まりは数人の子どもたちの自由遊びにあったが、それはすぐにクラス全体、五歳児クラス全体の集団活動になり、ついには園全体を巻き込んだ「時計フェスティバル」になった。教師たちは小さな遊びから大きな規模の活動への橋渡

しを様々な方法で行う。

L・コトロフによる研究でも三人の子どもの自発的な遊びが三週間のクラス全体の活動に発展したということが報告されている。コトロフによれば、子どもたちは個人的な遊びをしても、必ずクラスの集まりに出来上がったものを持っていく。教師は、子どもたちに、うまくできない友達を助けるように言う。また子ども一人一人の作品のユニークな特徴を褒めて自信をもたせるだけでなく、他の子どもにも影響を与えるようにしている。

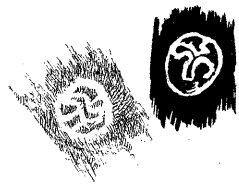
コミュニティを築くためのその他の方法

様々な意味で日本の幼稚園はコミュニティというものを避けられない。子どもたちはしばしば集合的にクラスの名前（さくら組さんなど）で呼ばれる。クラスメイトをさす言葉は「ともだち」である。「遠足の絵を書くときにはお友達を忘れな

いで」という時、この

言葉は個人的な友人を指すのではなく、クラスの人々全体を指している。子どもの友達関係を尋ねるときには「個人的な友達」という言葉を用いなければならない。

コミュニティの一部であるということは行事を共有することである。全てのクラスが一日の始めと終わりに歌やダンスや話し合いなどの行事を行う。このような行事は、歌を歌って挨拶をする程度のものから園全体の集会まで様々である。毎日あるいは毎週ある行事に加えて、入学式・卒業式・運動会などの大きな式や祭が行われる。このようなときには両親も参加する。子どもたちは、両親や新入生や地元の人々に見せるためにダンスや歌を数週間かけて練習する。幼稚園の



行事では、楽しさと全員参加、集団全体の成長や達成を確認することが重要視されている。また、歌やダンス、行事、図工の作品作りなどは全て、「友達」や「家族のような」コミュニティの一員なのだという感覚を強めている。

責任感あるメンバーになる——自由遊びの役割

自由遊びは、日本の幼稚園生活の第二の目標、つまりクラスの中の責任感ある親切なメンバーになることに役立っている。

筆者が調査したすべての幼稚園で一日に少なくとも一回のクラスの集まりがあり、そこでは必ずその日の活動を振り返る。誰かが喧嘩したことや泣いたこと、危なかったことなどが取り上げられる。教師は、筆者から見れば個人的な問題に思われること（誰かがわがままを言ったとか誰と誰が喧嘩をして誰が仲裁に入ったかなど）をクラスのコミュニティ全体の問題として取り上げる。子ども

もたちは解決方法を考えることを求められ、解決を助けた子どもは褒められる。

話し合いでは、教師の価値観がはっきりと現れる。教師は子どもたちが仲間外れをしないで遊んでいたかどうかについてコメントすることが多い。また、最も一般的な話題は係の仕事についてである。動物の世話や掃除について係の子どもから注意してほしいことが述べられ、教師のコメントによって議論が起る。動物を飼うとはどういうことか、友達が係の仕事をさぼっていたらどうするか、危ないことをしている子がいたらどうするかなどについて時には二十分から三十分の話し合いが続く。教師は子どもたち全員が興味を持つように、大げさな言い方で説明したり、子どもの意見の橋渡しをしたりする。しかし、教師が答を与えるということはほとんどない。むしろ、たとえ時間がかかっても子どもたちで問題解決できるように刺激を与えている。そして、このような議

論にかける時間が長く、関心も高いことから、このような議論をする事が筆者が訪ねた日本の幼稚園の本当のカリキュラムであると考えようになつた。葛藤や親切というものを伴う自由遊びがこのカリキュラムに役立っている。その日の予定がどうであれ、遊びの中で起こった問題が常に優先され得るのである。

一九八四年の全国規模の調査でも、日本の幼稚園では、「係・日直」、「運動会」が重要な活動と見なされ、自由遊びとグループやクラス全体のめあてが重視されているということが明らかになっている。また、文部省の幼稚園教育の目標も「興味」「関心」「意欲」を育てることに焦点が当てられている。

相反するイメージ——自由な遊びか受験準備か？

アメリカのメディアが、日本の子どもものの幼稚園の受験準備について心が痛むような話を伝えてき

たために、日本の幼稚園で自由遊びが重視されていると聞いてアメリカ人はたいへん驚く。調査によると、特別な活動を通して子ども能力を発達させる

ことを重視する日本の幼稚園はわずか二パーセントである。公立私立の違いはあるが、文字や数字を直接教える幼稚園は少ない。

H・ステイブソンンの日米比較調査によれば、むしろアメリカの幼稚園の方が勉強を直接教える活動が多く、日本の子どもはアメリカの子どもの四倍近くの時間を自由遊びに費やしている。

また、J・トビンの調査では、半分以上のアメリカの親は幼稚園で勉強がうまく行くことが重要と考えているのに対し、そのような考えを持つ日本の親は一パーセント未満である。逆に日本の親の



八十パーセントが他人への思いやり・共感・関心を重要視しており、このことを重視するアメリカの親はわずか三十九パーセントだった。さらに、別の調査では、子どもが幼稚園でうまくやっていたために母親ができることとして、教育的な活動を共にするのが最も良いと考える母親は、アメリカではほぼ半数であるのに対し日本では二パーセントしかない。日本の母親は、子どもの健康を守り、幼稚園の活動に興味を示すことが最も良いと考えている。

ロイス・ピークの研究によれば、「エリート」小学校に入学した子どもの半数は受験準備をする教室に通っていたが、公立の小学校に入学した子どもではほとんどいなかった。日本の子どもの九十九パーセントは公立の小学校に通うということを考えれば、受験準備クラスに通うことは希であると言える。また、幼稚園児が通う受験準備クラスでは、読み・書き・算を教えるのではな

く、「楽しく自信のある自己表現、正確に指示に従うこと、典型的なテスト項目に慣れておくこと」を教える。文部省の立場に従い、「エリート小学校の入学では読み・書き・算の技能の要求は小限に抑えられ、子どもたちには複雑な指示を理解し覚えることが要求される。幼稚園での受験制度のプレッシャーは勉強ではなく文部省の政策が示すような子どもの態度への要求としてかかっているのだろう。アメリカの調査によれば、遊び中心の幼稚園カリキュラムの方が、直接的に教えることよりも、学ぶ意欲を育て、より高度な学習達成を促す。なぜなのだろうか。それはおそらく子どもは自分にとって意味のある活動をしているときに最も良く学ぶことができるからであろう。

(お茶の水女子大学大学院)

編集後記

五月の連休の谷間のことだった。「春を探しにいこう」という生活科の授業で、団地の中を散策に行つた日、娘は後ろにひっくり返りそうになるほど重いリュックサックを背負って帰ってきた。

「おみやげ持ってきたんだよ！」と嬉しそうにその中身を出すと、何といくつもの大きな石が、ゴロゴロと出てきた。「これ、春の石だよ！」と娘はニコニコしている。「？」一瞬何のことだか分からないでいる私に「石がね、とってもあったかかったんだよ。冬は石が冷たいでしょ。だから、これは春だと思ってたの」。なるほど、納得。とともにそ

の発見にかなり感激した親バカな私。タンポポなどの草花は、摘んで持ち帰っても、しぼんでしまうからとのことだった。「でもね、みんなが、ただの石じゃんって言った」と少し、しよげてもいた。

家族からは口々に「大発見！」と言われても、学校向きではないと悟ってか、その日のことを書く宿題の作文には「タンポポやチューリップが咲いていました」と当たり障りのないことを書いていたのが、私の中で引っかかっている。

自分なりの感じ方や表現は、成長するにつれて、見限られていくのか。それとも使い分けながら持ち続けられていくのか。せめて後者であって欲しいと願う。

春の石は、オタマジャクシの水槽の中で今も活躍している。(田)

幼児の教育

第九十五巻 第九号

(一九九六年九月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成八年九月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五一一一一

発売所 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一一四十九

☎〇三一一五三九五五六六一三(営業)

☎〇三一一五三九五五六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇一一一九六四〇

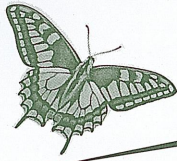
☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

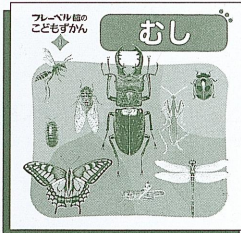
フレーベル館の

こどもずかん

新刊



子どもたちに
最初にあたえたい本格的な基本図鑑。
大人向けの解説文も詳しく掲載しました。



21cm×22cm・22頁・定価780円(本体757円)

①むし

中山周平 監修
細密イラストで、
約90種の虫を紹介
します。



21cm×22cm・22頁・定価780円(本体757円)

④いぬ

今泉忠明 監修
写真と細密イラ
ストの組み合わ
せで、約60の犬
種を紹介します。



21cm×22cm・22頁・定価780円(本体757円)

②はなきのみ

中山周平 監修
細密イラストで、
約100種以上の
木の花・草の花
・木の実を紹介
します。



21cm×22cm・22頁・定価780円(本体757円)

⑤ねこ うさぎ ハムスター

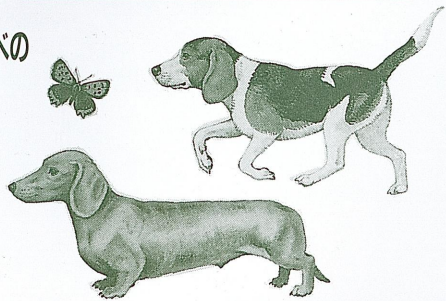
今泉忠明 監修
写真と細密イラ
ストで、ねこや
うさぎなど50種
を紹介します。



21cm×22cm・22頁・定価780円(本体757円)

③さかな みずべの いきもの

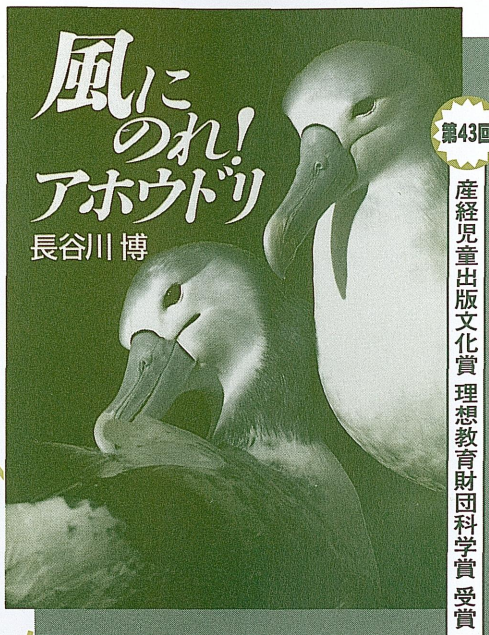
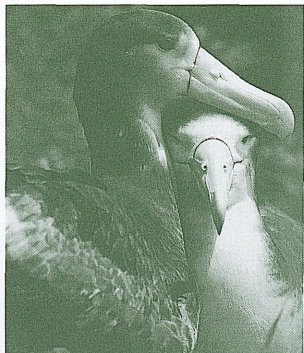
武田正倫 監修
細密イラストで、
約130種の海や
川の魚やその他
の生き物を紹介
します。



キンダーブックの
フレーベル館

風にのれ! アホウドリ

一時は絶滅したかと思われていたアホウドリ。20年近く鳥島に通い続け、その保護に力を傾けてきた著者が、美しい写真とともに道のりをつづった一冊です。デコイを使った引っ越し作戦などでよみがえりつつあるアホウドリの姿が親しみやすい語り口で紹介されます。



推薦

全国学校図書館
協議会選定図書
日本図書館協会選定図書
95年SLBC選定図書

長谷川 博・著

24×19cm・104頁

定価1,600円(本体1,553円)



キンダーブックの
フレーベル館